



## 寄稿

多田 邦尚会員 海洋立国推進功労者表彰受賞	01
安田 一郎会員 海洋立国推進功労者表彰受賞	02
須賀 利雄会員 海洋立国推進功労者表彰受賞	03

## 情報

南極研究に関する日豪ワークショップ	03
海洋若手研究集会 報告	04
若手海外渡航援助 報告	05
女子中高生夏の学校 報告	06
学界動向	06
JO・海の研究の目次	10
カレンダー	12
JOS ニュースレター アンケート結果	12

## 連載

アカデミア メランコリア	14
--------------	----



### 寄稿 ①

## 多田 邦尚 会員「第18回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)」受賞

香川大学 農学部 一見 和彦

この度、香川大学名誉教授・香川大学瀬戸内圏研究センター客員教授の多田 邦尚会員が、「沿岸海域の環境研究と環境保全、および沿岸海洋学の普及啓発に貢献」した功績により、第18回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)を受賞され、2025年7月21日に東京国際クルーズターミナルにおいて表彰式が行われました。

本表彰は、2008年より科学技術、水産、海事、自然環境など海洋に関する幅広い分野における普及啓発、学術・研究、産業振興等において顕著な功績を挙げた個人・団体に対して設けられたもので、毎年、国土交通省、文部科学省、農林水産省、経済産業省およ

び環境省が内閣府総合海洋政策推進事務局の協力を得て実施されています。受賞者の功績を称え広く紹介することにより、国民の海洋に関する理解・関心を醸成する契機とすることを目的に制定されています。

多田会員は、長年にわたり日本の代表的な閉鎖性海域であり、水産業、とりわけ養殖が盛んに行われている瀬戸



海洋立国推進功労者表彰のメダル

内海の物質循環に関する研究を行ってきました。閉鎖性海

域における低次生産生物と生元素の挙動を解明するため、一次生産量の測定をはじめ、大型珪藻や夜光虫赤潮に伴う炭素・窒素・ケイ素などの挙動、海底堆積物からの栄養塩類の溶出速度の推定などについて、フィールド調査と室内実験の双方からアプローチし多くの研究成果をあげられました。また、広島大学、愛媛大学、名古屋大学、金沢大学の他、大阪府、兵庫県、岡山県、香川県などの府県の研究機関とも多くの共同研究を展開し、センター長を務められた香川大学・瀬戸内圏研究センターを東部瀬戸内海の研究・教育拠点として、瀬戸内海の環境研究を中心的に牽引してられました。その研究成果は高く評価され、2016年度日仏海洋学会賞「沿岸海域の低次生物生産過程と生元素循環に関する研究」、2025年度日本海洋学会宇田賞「閉鎖性海域における物質循環研究の推進と環境保全



海洋立国推進功労者表彰を受賞された多田 邦尚会員(後列左端) 安田 一郎会員(後列右端から2番目)、須賀 利雄会員(前列右端)



活動の普及啓発」を受賞されています。以上に加え、非営利活動法人・瀬戸内海研究会議の理事長、副理事長、企画委員長等を務められ、瀬戸内海的环境保全と次世代の沿岸海洋研究者の育成に尽力してられました。香川大学においては、瀬戸内圏研究センター庵治マリンステーションを活用し、高校生・一般市民を対象に海洋実習・講演等(日本財団・海と日本プロジェクトなどの後援による)を開催され、大学生向けの教科書「海洋科学入門」(恒星社厚生閣)、一般市民向けの「瀬戸内圏の干潟生物ハンドブック」(恒星社厚生

閣)や瀬戸内海的环境に関する教材動画(瀬戸内海環境保全協会)等の作成にも尽力され、沿岸環境の理解に力を入れてられました。これらの啓蒙活動に対して、2012年文部科学大臣表彰「干潟を含めた浅海環境研究と市民への普及啓発」を受賞されています。

この度の受賞は、上記のように多田会員の沿岸域の物質循環研究の推進と環境保全活動の普及に対する貢献が高く評価された結果であり、多田会員の受賞を学会員の皆様と共に祝いしたいと思います。



## 寄稿②

# ■安田 一郎 会員「第18回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)」受賞

東京大学 伊藤 幸彦

このたび、安田 一郎会員(海洋研究開発機構 特任上席研究員、東京大学大気海洋研究所 名誉教授)が、第18回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)を受賞され、2025年7月21日に東京国際クルーズターミナルにおいて表彰式が執り行われました。

安田会員は、海洋乱流鉛直混合と海洋・生態系変動の実態解明に多大な貢献をされ、その功績が高く評価され、「海洋に関する顕著な功績」分野「海洋に関する科学技術振興」部門においての受賞となりました。

安田会員の研究は、北太平洋の表中層循環、特に中層水の形成・循環過程を中心に、気候・生態系・水産資源変動、さらには観測手法の開発にまでおよぶ、非常に幅広いものです。東北区水産研究所に在籍していた1990年代前半には、サンマ資源調査と連携し、本州東方や親潮・オホーツク海における大規模な船舶観測データを解析し、北太平洋中層水がオホーツク海に起源を持ち、亜熱帯循環へ流入していることを発見しました。1994年に東京大学理学部へ異動後は、大学院生との研究を通じて、千島列島海峡部に非常に強い日周潮流が存在すること、海峡部での鉛直混合が亜寒帯・亜熱帯境界を横切る親潮流量を増大させること、潮汐振幅を変化させる月の軌道面18.6年周期変動が親潮域周辺の水塊や栄養塩変動と同期していること、さらにマイワシなどの水産資源が海洋環境変動と関連して変動することを示しました。これらの成果を基に、「潮汐18.6年周期変動に伴う海洋鉛直混合が、海洋中層循環を通じて物質循環・気候・海洋生態系の維持と変動に影響を及ぼす」という独自の仮説を打ち立てました。2005年には東京大学海洋研究所(後に大気海洋研究所)教授として着任し、この仮説を実証するため、2,000mまで観測可能なケーブル付き乱流計を日本で初めて導入し、黒潮域・親潮域・オホーツク海・ベーリング海等さまざまな海域で精力的に観測を推進しました。これらの功績により、「北太平洋中層水の形成・輸送・変質に関する研究」において2011年度日本海洋学会賞を受賞しています。また2015年から2019年にかけては、上記仮説を軸に展開する科研費新学術領域「海洋混合学の創設：物質循環・気候・生態系の維持と長周期変動の解明」を領域代表として牽引し、海洋物理学のみならず化学・生物・気候・水産分野を融合した分野横断型海洋学の新たな道を切り拓きました。

安田会員は、これらの研究活動の中で多くの大学院生を指導し、多くの人材を海洋関連の研究機関・大学・企業などに送り出して

きました。また、東北区水産研究所、東京大学理学部、海洋研究所・大気海洋研究所において多くの共同研究を行い、共同研究者の発展にも貢献しています。安田会員はまた、日本海洋学会でも有数のocean-going型研究者であり、太平洋・オホーツク海・ベーリング海を中心に多数の航海を企画し、実際に乗船して観測を実施してきました。退職直前の2025年2-3月には、白鳳丸に主席として乗船し、黒潮域の物理・化学・生物・水産の連携観測を成功に導いています。高速水温計をCTDに取り付けて乱流強度を定量化する手法の開発に成功したことは、豊富なCTDおよび乱流観測経験に加え、乱流推定の技術的要件、そして乱流データに基づく拡散係数の情報が物理分野のみならず化学・生物分野においても強く求められていることを熟知していた安田会員ならではの成果であり、日本初の技術として今後のさらなる普及・発展が期待されています。日



2025年2-3月の「退官記念」白鳳丸KH-25-1航海において、教え子の佐々木 雄亮さん(左、現・東北大)と水中グライダーの投入準備をしている安田 一郎会員(右)

本海洋学会においては、Journal of Oceanography 編集委員、各賞推薦委員、幹事などを歴任し、海洋研究の発展に尽力されてきました。現在所属する JAMSTEC 地球環境部門 海洋観測研究センターにおいても、観測機器の開発や技術の高精度化、分野横断的な連携支援や成果の取りまとめに尽力されています。

このように、安田会員は海洋・生態系・気候研究の分野で顕著な業績を挙げ、多くの人材を育成するとともに、観測手法の開発にも大きく貢献してきました。安田会員の海洋立国推進功労者表彰を心より祝い申し上げるとともに、日本の海洋研究のさらなる発展に向け、一層のご活躍とご健勝をお祈りいたします。



### 寄稿 ③

## 須賀 利雄 会員「第18回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)」受賞

日本海洋学会 会長 江淵 直人

このたび東北大学大学院理学研究科の須賀 利雄 会員が第 18 回海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)を「海洋立国日本の推進に関する特別な功績」分野で受賞され、7 月 21 日に授賞式が行われました。受賞対象となった功績は、「地球規模の海洋観測網構築による海洋における気候変動研究の推進に貢献」です。

須賀会員は、大洋規模から地球規模までの海洋物理環境の実態と変動の解明に長年にわたって取り組み、多くの研究業績を挙げ、海洋における気候変動研究の基礎を築いてきました。特に、海洋表面における変動が海洋内部に伝わる過程を独自の手法で定量化し、海の温暖化や貧酸素化のメカニズム解明の枠組みを構築しました。海洋変動研究を革新した地球規模のロボット海洋観測網アルゴ(Argo)の構築、および、その変革的拡張である OneArgo 計画の立案・実施を、国内チームおよび国際運営チームの代表として推進してきました。また、海洋・気候変動に関する国際共同プログラム(WCRP 等)の専門家パネルメンバーや対応する学術会議小委員会委員・委員長などを歴任し、その推進に貢献しました。国連気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の活動にも主要執筆者・執筆協力者等として貢献してきました。

2000 年の開始以来、延べ 30 か国以上が協力し、300 万点以上の水温・塩分プロファイルデータを収集・公開して、IPCC による地球温暖化の評価等に大きな貢献をしてきた国際アルゴ計画に当初から参加し、2018—2023 年には我が国から初となる国際アルゴ運営チーム共同議長を務めました。また、2019 年に公表された「IPCC 海洋・雪氷圏特別報告書」の海洋分野における我が国からの唯一の主要執筆者に選出されるなど、海洋立国日本への貢献を行ってきました。

須賀会員は、現在、世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)の下、東北大学と海洋研究開発機構が共同で運営する分野横断海



海洋立国推進功労者表彰を受賞された須賀 利雄会員

洋科学研究拠点「変動海洋エコシステム高等研究所(WPI-AIMEC, 2024 年に設立)の研究所長を務めています。また、日本海洋学会を含む水産・海洋科学研究連絡協議会加盟 17 学会共同による大型研究計画立案の取り組みを国際 Argo 計画と結び付けて、「統合全球海洋観測システム OneArgo の構築と海洋融合研究の推進」計画の立案・提案を主導し、学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想—ロードマップ 2023—への掲載(2023 年 12 月)を果たしました。

須賀会員の一連の海洋科学における業績と国際アルゴ計画を中心とした国内外における海洋観測推進に関わる活動実績が海洋立国日本を支える学際的な海洋科学の推進の貢献として高く評価され、今回の受賞に至ったものと思います。今回の受賞が、今後のさらなるご活躍につながることを期待します。



### 情報 ①

## 南極研究に関する公開シンポジウムおよび日豪ワークショップ

国立極地研究所 平譯 享／オーストラリア南極局 川口 創／タスマニア大学 山崎 開平

日本学術会議地球惑星科学委員会・地球惑星科学国際連携分科会が主催、情報・システム研究機構国立極地研究所、オーストラリア南極局、タスマニア大学、およびオーストラリア南極プログラ

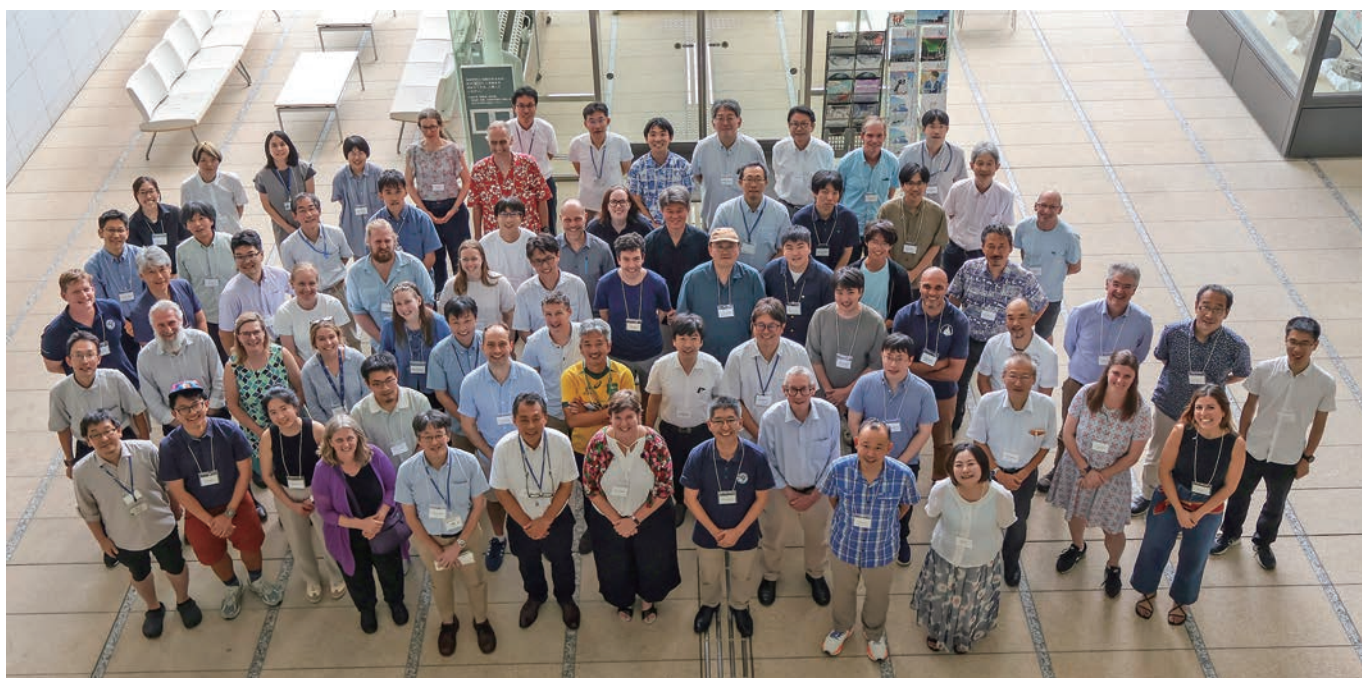
ムパートナーシップが共催となり、日本学術振興会二国間交流事業・オープンパートナーシップ研究共同セミナー、豪日交流基金、タスマニア州政府の支援のもと、7 月 28 日(月)に日本学術会議講堂



において、公開シンポジウム「地球温暖化は南極をどのように変えるか？ ー日豪共同研究の新展開ー」を開催した。本シンポジウムは、オーストラリアと日本の南極研究者と専門家約 80 名(オーストラリアからの参加者 25 名含む。多くは海洋研究者。)が一堂に会し、南極域環境についての先端的研究や、南極研究に関する日豪の協力関係について一般向けに紹介することが目的。当日は、研究者による講演が行われた後、南極研究の将来展望や今後の両国の関係強化の必要性についてパネルディスカッションが行われた。一般参加者を合わせた参加者数は 110 名を超え、急速に変化する南極域環境や、南極研究に関する日豪の協力関係について、広く紹介することができた。

公開シンポジウム後に開催した関係者会合では、過去の日豪の関係についてのレビューや現在進行中の研究計画の紹介があり、特に、新たに日豪の共同研究を開始しようとする研究者や若手研究者にとって有益な情報となった。また、その会合に出席された在日オーストラリア大使館や文部科学省海洋地球課に向けても、南極研究における日豪共同研究体制の重要性をアピールできた。

翌 7 月 29 日(火)および 30 日(水)には、国立極地研究所、オーストラリア南極局、タスマニア大学、および、オーストラリア南極プログラムパートナーシップの主催により、国立極地研究所内において、「南極研究に関する日豪ワークショップ」を開催し、海洋、海水、生物、生態学、生物地球化学、地質、氷河、ロジスティクス、大気科学など、幅広い分野の大学や政府機関の専門家約 80 名が参加した。南極海研究に関して、日本とオーストラリアは 40 年以上にわたる協力関係の歴史があり、2008 年の日豪両首相の共同ステートメントに端を発する本ワークショップは今回で 5 回目となった。コロナ禍によって一時開催が途絶えていたが、今回のワークショップによって両国の研究計画が改めて共有され、今後 5 年間の具体的かつ新たな協力体制について活発な議論が行われた。議論の結果はコミュニケとしてまとめられた。近日、より詳細な報告書を作成するとともに、国際極年 2032-2033 (IPY-5) とその南極沿岸域における国際的な実装計画 Antarctica InSync を含め、東南極域における日豪共同観測について議論を進める。



ワークショップ参加者集合写真(撮影：Mark Horstman/AAPP)



## 情報②

# 2025 年度 海洋若手研究集会 開催報告

京都大学 理学研究科 吉川 浩一郎(幹事代表)  
神戸大学 海事科学研究科 福本 剛史(幹事)

今年度の海洋若手研究集会は、京都大学と神戸大学が幹事を務め、8 月 27-29 日にかけて、和歌山県西牟婁郡白浜町「白浜温泉紀州半島」において開催いたしました。人気の海水浴場である白良浜を望むことができる同施設において、51 名の方にご参加いただきました。

今年度は、京都大学理学研究科地球惑星科学専攻水圏地球物理学講座の吉川 裕教授、同講座の坂本 圭准教授、そして神戸大学大学

院海事科学研究科の藤原 泰助教の 3 名に招待講演をしていただきました。吉川 裕教授には「海洋物理の楽しみ方：エクマン流を例にして」、坂本 圭准教授には「気象庁日本近海モデルの開発とその利用」、藤原 泰助教には「ストークスドリフトと海の流れ」という題で、これまでの研究人生を絡めつつお話をさせていただきました。参加者からも非常に好評で、質疑応答が活発に行われただけでなく、その後の懇親会においても学生と先生方で活発な交流がありま



した。

学生発表の部では、自己紹介6件、ポスター発表42件、口頭発表3件を行い、参加者全員が発表をすることができました。ポスター発表は4つのブースで並行して発表を行い、最大限様々な発表を聞くことができるようにしました。また口頭発表は、いずれも独特のスケールやターゲットを有する3名に行っていただきました。それぞれの発表において活発な質疑応答があっただけでなく、発表外でも各所で活発な議論が見られ、参加者の皆様の今後の研究につながる有意義な時間になりました。また、食事や懇親会を通

し、学年・所属を問わず参加者同士の交流が活発に行われ、今後の研究生活において貴重なつながりが形成されたと感じています。

来年度の幹事校は、東京大学に決定しております。来年度は、海洋若手研究集会がさらに盛り上がり、かつ若手研究者にとってより良い場所となることを願っております。

最後に、今年度の海洋若手研究集会は日本海洋学会若手集会助成の支援を受けて開催されました。若手研究者にとって貴重な会を開催する支援を頂いたこと、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



海洋若手研究集会の参加者(大会1日目)



### 情報③

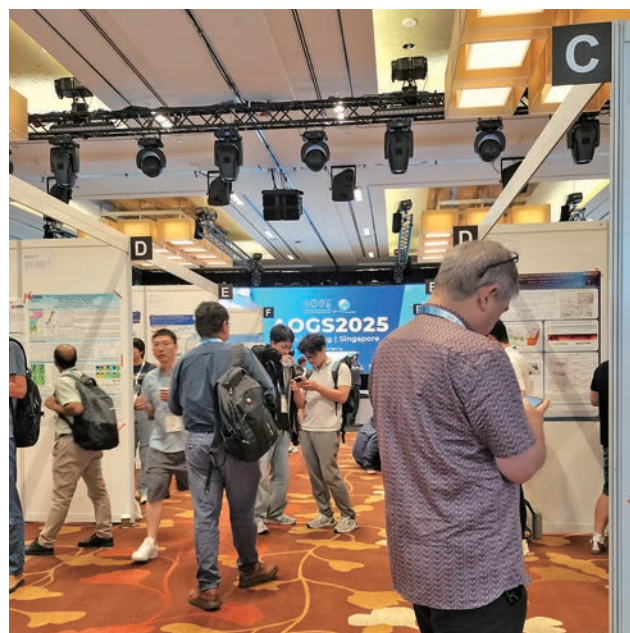
## 2025年度 若手海外渡航援助 報告

東北大学 理学研究科 原野 早陽花

このたび、日本海洋学会の若手研究者海外渡航支援を受け、2025年7月28-8月1日にシンガポールで開催されたAOGS2025(Asia Oceania Geosciences Society 2025)に参加いたしました。私は、海洋科学セッション「Global Western Boundary Currents: Their Physical, Chemical, and Biological Impacts on Climate and Ecosystems (iii)」において、ポスター発表「Ocean Response to Typhoon Observed in a Marine Ecosystem Model」を行いました。

私は、海洋低次生態系モデル OFES の出力を用いて、台風通過時における海洋の物理・生物応答についての研究を行っています。これまでの解析により、台風の移動速度が遅いと大きな海洋の変化を引き起こす一方、台風通過前の栄養塩の鉛直勾配も台風通過前後の植物プランクトン変化に影響を与える可能性があることが分かりました。今回の発表ではこれらの成果を紹介し、10名以上の参加者と意見交換を行う中で、多くの学びと刺激を得ることができました。

特に、防災の観点から台風の研究に取り組まれている方からは、近年の台風の特徴や動向について伺うことができました。具体的には、近年傾向として、台風移動速度の増加、あるいは発生位置の北



AOGS2025 のポスター会場の様子

上といった変化が見られる可能性がある、とのご指摘をいただきました。これらの視点をもとに、台風が引き起こす将来的な海洋生態系の変化について、今後さらに踏み込んだ検討を行っていききたいと思います。

また、モデル開発に携わる研究者からは、モデルと実際の海洋との違いをどのように解釈し、説明するかが重要であるとの助言をいただきました。実際に、ポスター発表中に「(私の研究は)あくまでモデルデータを使用した結果だが、現実の海洋ではどうか」といった質問を複数いただき、そうした点への注目度の高さを感じました。単なるモデル解析にとどまらず、説得力のある形で現実と接続

した研究を展開していくために、その差異についての解釈や伝え方についても工夫を重ねていきたいと考えています。

今回の海外渡航では、学術的な学びにとどまらず、現地の多様な文化や価値観に触れることもできました。これにより、自身の視野が広がるとともに、思考に深みが増し、大変意義深い経験となりました。このような貴重な機会をいただきました日本海洋学会の若手研究者海外渡航支援制度に深く感謝いたします。また、ご多忙の中、選考にご尽力くださった関係者の皆様にも、心より御礼申し上げます。



#### 情報④

### 「女子中高生夏の学校 2025 ～科学・技術・人との出会い～」参加報告

教育問題研究会 安中 さやか／川合 美千代／渡部 裕美

「女子中高生夏の学校(夏学)」(<https://natsugaku.jp/>)は、理系に進む女子学生を増やそうと、2005 年より開催されてきた夏の恒例イベントです。今年は、全国 29 都道府県から 90 名の女子中高生と 33 名の学生 TA、総勢 252 名のスタッフが参加しました。

日本海洋学会では、ポスター展示「研究者・技術者と話そう」と進路・キャリア相談カフェに参加し、「海を知って地球を守ろう！海のなぞを探る仕事のあれこれ」と題したブース展示を行いました。朝捕れプランクトンの観察をメインに、各種ビラやパンフレットを用意しました。中高生はもとより、大学生や大学院生、高校の先生、他学会や企業の方々まで、多くの人が訪れてくれました。

中高生にとっての海のイメージは、やはり海の生き物のようで、海のダイナミックな動き、熱や二酸化炭素の貯蔵庫であることは、ほとんど知られていないようでした。これからも、様々な機会を捉えて、海の魅力を伝えていかなければと思いました。

以下、今回、初参加の渡部(JAMSTEC)のコメントです。

「夏学は、中高生みなさんに海洋学会や海の研究の魅力を伝えるというだけでなく、中高生や大学生みなさんが海についてどのような知識を持っていて、どんなことを考えているのかを直接聴くことができる良い機会です。また、他の学協会や企業のリクルーティングに関する取り組みを拝見したり、具体的に話を伺う

こともできました。今後の海洋学会の取り組みに生かせるものもありそうです。若手みなさんにも、今後ぜひ参加してもらいたいと思います。」

夏学は、学会補助を得て参加しているイベントです。皆様も一緒に参加してみませんか？



女子中高生夏の学校 2025 の会場の様子



#### 情報⑤

### 学界動向

日本海洋学会 副会長 原田 尚美

#### 1. 日本学術会議

地球惑星科学分野に関わる日本学術会議の活動として、7 月 12 日(日)に開催された学術フォーラム「急激に変わりゆく地球環境と国際情勢：地球惑星科学の国際連携・国際協調」は、国家間の対立が顕在化し国際協調・連携が難しくなっている中で、今後の日本の果たす役割や国際連携の維持や深化について考える機会となった。7

月 28 日(月)に開催された公開シンポジウム「地球温暖化は南極をどのように変えるか？一日豪共同研究の新展開」では、コロナ後の日豪の南極研究に関わる協力関係の再出発の機会として、今後の関係強化、共同研究の具体化について議論が行われた。(原田 尚美)



## 2. Intergovernmental Oceanographic Commission; 国連教育科学文化機関(ユネスコ)

2025年6月25日－7月3日、パリのユネスコ本部において第33回総会が行われた。日本からは、齊藤宏明・東京大学大気海洋研究所教授を政府代表団長とし、東大大気海洋研究所、文部科学省、気象庁、海上保安庁、海洋研究開発機構から関係者が出席した。道田が議長として議事進行を担当し、3件の決議(Resolution)と28件の決定(Decision)を採択してほぼ予定通り閉会した。6月上旬にニースで開催された国連海洋会議の結果を踏まえた国連海洋科学の10年の後半5年の進め方、津波防災、世界海洋観測システムの強化に加え、BBNJへの対応、持続的海洋管理等政策マターに関する議論が行われた。また、米国の国連に対する姿勢を考慮した厳しい財政状況への対応、ユネスコ内におけるIOCの機能的自律性の担保に関して集中的な議論が行われた。役員改選が行われ、道田が議長に再選され2027年の総会終了時まであと2年議長を継続することとなったほか、5つの選挙区選出される副議長5名は、米国、ブルガリア、チリ、韓国、エジプトからそれぞれ選出された。執行政事国選挙では、前回に引き続きロシアが議席を獲得できなかった。(道田 豊)

## 3. International Oceanographic Data and Information Exchange; 海洋データ・情報交換

2025年3月12－14日、コロンビアのサンタマルタにおいて第28回IODE会議が行われた。これに先立って3月10－11日、海洋情報カンファレンスが行われた。あいにくWESTPAC政府間会合がちょうど同じ日程で東京で開催されたこともあり、日本からは、鈴木 亨・日本水路協会海洋情報研究センターが1人出席した。ここ数年構築が進んできている海洋データ・情報システム(ODIS)の進捗状況を踏まえた今後の推進方策、BBNJの発効が迫る状況の中でそれに対する情報管理の面からの対応策等が議論された。長年IODEの事務局を切り回してきたPissierssens氏が5月末で退職し、Joanna Post氏がGOOSとともにIODEも担当することとなった。(道田 豊)

## 4. United Nations Decade of Ocean Science for Sustainable Development; 持続可能な開発のための国連海洋科学の10年

2025年8月6日に第7回国連海洋科学10年国内委員会が開催され、世界と国内の動向について国内機関・委員より共有された。期待される情報発信や国内委員会の役割についてディスカッションが行われた。2025年6月にフランス・ニースで開催された第3回国連海洋会議に際して各国National Decade Committeeが集う対面会合が開催され、日本からは齊藤 宏明委員が参加した。地域レベルでの情報共有やワークショップ、2027年Ocean Decade Conferenceに向けた準備、各国政策とVision 2030との繋がりなどが議論された。(田中 広太郎)

## 5. International Union of Geodesy and Geophysics; 国際測地学・地球物理学連合 / International Association for the Physical Sciences of the Oceans; 国際海洋物理科学協会

2025年7月20－25日までの6日間、韓国・釜山市の釜山国際コンベンションセンター(BEXCO)において、IAMAS-IACS-IAPSO

Joint Assembly 2025 (BACO-25)が開催された。参加登録者は1,725名で、そのうちセッション参加者は1,282名、日本からは計122名が参加した。発表件数は合計1,093件(口頭発表764件、ポスター発表329件)に上った。

IAPSO独自のセッションは7件、またIAPSOが主催したジョイントセッションは10件で、IAPSO関連の発表は合計321件に達した。いずれのセッションでも活発な議論が交わされた。本大会では地球環境に配慮した運営として、ペーパーレス化やプラスチック使用削減に積極的に取り組み、サーキュラーやプログラムブックはすべてスマートフォン対応とし、紙媒体は廃止された。なお、2027年7月16－22日に韓国仁川広域市の松島(ソンド)コンベンシアで第29回IUGG総会、2029年7月には英国マンチェスター大学を会場としてIAMAS-IAPSO Joint Assemblyが開催されることが内定している。(日比谷 紀之/升本 順夫)

## 6. フューチャー・アース

気候変動について今伝えたい、10の重要なメッセージ(10 New Insights in Climate Science, 10NICS)は、Future Earth、The Earth League、World Climate Research Programme (気候変動国際共同研究計画)が共同で制作する統合政策報告書が公開された。

(植松 光夫)

## 7. Surface Ocean Lower Atmosphere Study; 海洋大気間物質相互作用研究計画

2025年7月20－25日に韓国・釜山で行われたIAMAS-IACS-IAPSO合同の国際会議(BACO2025)でSOLAS共催のセッション(JMCP19)を実施した。また、国内の活動として2025年5月のJpGUにおいてSOLAS関連のセッション(A-CG50)を実施した。今後の予定として、2025年11月12－14日にオーストラリアのメルボルンにてSSC Meetingが実施される予定である。また2026年3月には、10回目となるSOLAS Summer Schoolがブラジル(CEPENE)で開催予定である。2003年から始まったこの取り組みは過去に600名を超える若手研究者を育成した実績のある国際的なSummer Schoolである。(野村 大樹)

## 8. Integrated Marine Biosphere Research; 海洋生物圏の統合研究

2025年5月にFuture Oceans 3がハイブリッド(上海 & オンライン)で開催され、IMBeRの成果および後継プロジェクトに関して議論された。国内の活動としては、2025年7月にCLIVAR小委員会と合同で東大大海研共同利用研究集会「海洋熱波に関する物理過程およびその生物地球化学的動態・生態系への影響」を開催した。2025年8－9月に東部北太平洋において白鳳丸航海(主席研究員: 小川 浩史会員)が実施される。(山下 洋平)

## 9. International Study of Marine Biogeochemical Cycles of Trance Elements and their Isotopes; 海洋の微量元素・同位体による生物地球化学研究

GEOTRACESは微量元素・同位体の海洋生物地球化学循環を研究する国際計画である。日本からは研究推進委員会(SSC)に西岡 純会員(共同議長)と近藤 能子会員が参加している。2025年6－8月

に白鳳丸 KH-25-3 次研究航海(GEOTRACES GPpr-16)がベーリング海にて実施された。7 月にはドイツにて GEOTRACES International Synthesis Workshop がハイブリッド方式で開催され、小畑 元・西岡 純・近藤 能子会員がオンライン参加した。2025 年 10 月に SSC が CSIR-National Institute of Oceanography (インド)で開催され、各国の活動状況や今後の活動について議論される。同月中にはデータ管理委員会(DMC)、State Estimate Workshop も開催される。

(近藤 能子/小畑 元/西岡 純)

#### 10. UNDOs project OceanPredict; 海洋予測に関する国際共同研究

OceanPredict では、カナダ環境気候変動省の G. Smith 氏が新たに科学チーム共同議長に就任した(もう一人の共同議長はフランス Mercator Ocean の M. Drevillon 氏)。6 月に開催された国連海洋会議では「社会利益のための海洋予測能力向上に向けた活動の呼びかけ」と題したハイレベルサイドイベントを Mercator Ocean と共同で開催した。沿岸タスクチーム会合を 6 月 17-20 日にプレストで開催した。観測システム評価タスクチームが推進する「国連海洋科学の 10 年」プロジェクト SynObs は、推進する国際共同観測システム実験(SynObs Flagship OSE)のデータベースを JAMSTEC のサーバから公開した。OceanPredict 科学チームや SynObs などの関連プロジェクトから、Ocean Science Meeting 2026 に対し複数のセッションが提案されている。

(藤井 陽介/林田 博士)

#### 11. Global Ocean Ship-Based Hydrographic Investigation Program; 全球海洋各層観測調査プログラム

来年出版を目指し最近 10 年の GO-SHIP の科学的成果を取りまとめたレビュー論文を作成しているところである。また、OSM2026 で GO-SHIP 航海に関する最新の研究成果を共有するためのセッションを開催する予定である。

(重光 雅仁)

#### 12. Climate Dynamics Panel; 気候力学パネル

2026 年の Annual workshop について準備中である。テーマは気候の tipping point で、場所は中国の広州の South China Sea Institute of Oceanology、時期は 2026 年 3 月 23 日の週を予定している。

(佐々木 克徳)

#### 13. Climate and Ocean - Variability, Predictability, and Change/ Pacific Regional Panel; 気候と海洋-変動・予測可能性・変化研究計画/太平洋地域パネル

定期的にオンライン会合を継続し、直近は 2025 年 7 月 8 日に行われた。4 つの WG(ENSO 概念モデル、ENSO 指標、太平洋テレコネクション(PATAC)、TP BGC-物理相互作用)の活動報告を実施したほか、以下のような連絡・議論があった。

- ENSO 特別号は Earth Interactions 誌を追加し、投稿締切を 2025 年 12 月まで延長。

- 2026 年 5 月に JpGU 会議(東京)と合わせたワークショップ開催を提案中。PATAC と BGC 関連の 2 テーマで実施予定だが、二つのテーマをどのように両立させるか、および予算の困難がある可能性もある。

- 西太平洋(東経 165 度以西)の観測不足と Argo システムへの資

金脅威について議論。各国(豪州・中国等)との協力強化と政策提言作成を計画。

(安中 さやか/神山 翼)

#### 14. Group for High-Resolution Sea Surface Temperature; 高性能海面水温グループ

第 26 回 GHRST 会合が、2025 年 6 月 16-20 日にデンマーク気象研究所のホストによりデンマーク・コペンハーゲンにおいて開催された。欧米、オーストラリア、インド、中国はじめ各国の宇宙、研究機関を中心に、オンラインを含めて約 150 名が参加した。各機関から衛星の運用計画やプロダクトの開発状況などの報告と、タスクチームからの活動報告が行われた。また、ユーザーシンポジウムにおいて、極域における表面温度(SST、海面水温)、全球 SST の気候指標、衛星に基づく SST 気候データ、大気・海洋のモデリングにおける SST、海面水温のリトリバルやプロダクトの進展などのテーマで、発表と議論が行われた。第 27 回会合は JAXA および北海道大学のホストにより 2026 年 6 月 22-26 日に北海道・札幌で開催予定である。

(笹野 大輔/坂本 圭/高槻 靖)

#### 15. SCOR WG#152 Measuring Essential Climate Variables in Sea Ice (ECV-Ice); 海氷の生物地球化学に関する相互比較研究

海氷の生物地球化学に関して相互比較研究を実施し、観測手法や観測データ品質の統一を目的としたワーキンググループである。2016 年から開始し、サロマ湖(2016, 2018, 2019, 2021)、イギリス・イーストアングリア大学 Roland von Glasow sea ice chamber(2020)、つくば農環研(2020)、カナダ・ケンブリッジベイ(2022, 2023)での国際共同観測を実施した。また、毎年、年会を実施してきた(コロナ中はオンライン)。現在は、実施した相互比較実験を取りまとめ、海氷の生物地球化学に関する指針の作成中である。2023 年末をもって終了したが、相互比較実験は BEPSII や CIce2Clouds(WG163)で継続予定中である。2026 年 2-3 月には BEPSII、CIce2Clouds、CATCH 合同の国際 Sea Ice School を北海道サロマ湖で開催予定である。現在、準備を進めている段階にある。

(野村 大樹)

#### 16. SCOR WG#163 Coupling of ocean-ice-atmosphere processes: from sea-ice biogeochemistry to aerosols and Clouds (CIce2 Clouds)

雪氷圏における大気-海氷-海洋での物質循環に関しての相互作用について理解することを目的としたワーキンググループである。2021 年から開始し、定期的な zoom ミーティングを実施している。1 年に 1 度の年会も実施している。2024 年は SOLAS OSC(インド)の開催時に年会を実施した。また、CIce2Clouds では、硫黄および窒素循環、エアロゾルに関するレビュー論文を執筆した(投稿中)。2026 年 2-3 月には BEPSII、CATCH との共催で国際 Sea Ice School を北海道サロマ湖で開催予定である。また、School の後には、BEPSII、CATCH との年会を知床で実施予定である。現在、そのための準備を実施している。

(野村 大樹/林田 博士)

#### 17. SCOR WG#165 Mixotrophy in the Oceans - Novel Experimental designs and Tools for a new trophic paradigm (MixONET)

2025 年 5 月 20-22 日の間、スペイン・グラナダにおいて、



ワーキンググループ会議を対面式とオンライン式で開催した。混合栄養生物の生態生理を評価するための現場調査プロトコルの作成および総説に関する議論などを行った。(鈴木 光次)

#### 18. SCOR WG#168 Coordinating the development of gridded four-dimensional data products from Biogeochemical-Argo observations (4D-BGC)

このワーキンググループの目的は、BGC Argo 観測データに基づく4次元BGCデータプロダクトの開発・検証・共有について、異なる科学コミュニティ間での議論と調整を促進することである。最終的には、BGC Argo 観測の利活用を大幅に高め、海洋生物地球化学の理解を深化させるとともに、モデルの改良や政策決定に資することを目指す。2025年4月29日に、オーストリア・ウィーンでWG会合が開催され、前年の活動成果報告(データプロダクト、ウェビナー、Website等)が行われた。(藤木 徹一)

#### 19. SCOR WG#170 Physiology and Rates in Microbial Oceanography (PRIMO)

海洋生態系のおミクスデータと生物地球化学モデルを結合するための「通貨コンバーター」として機能する新たな生理学的指標を開発することを目的に、文献レビューを実施中である。項目として、一次生産、二次生産、栄養塩フラックス、相互作用が設けられている。これらの内容に関して、ワーキンググループ内外からのフィードバックの提供を下記のウェブサイトで求めている。また、オンライン会議をほぼ毎月実施している(<https://www.primoscorwg.org/>)

metrics-database)。

(鈴木 光次/横川 太一)

#### 20. UN World Ocean Assessment 3rd Process; 国連第3次世界海洋アセスメント

2025年7月28日-8月7日、スウェーデンのマルメにおいて最終の専門家グループ(GoE)会合が開催された(道田は事情により欠席)。最終原稿が揃ってレビュー等も完了し、予定通り2026年初めにはWOA-3が刊行される。WOA-4に向けた準備が既に開始され、各国等に専門家グループメンバー候補に関する推薦依頼が発出されている。(道田 豊)

#### 21. The Southern Ocean Observing System; SOOS 南大洋観測システム

南極海観測システムの2024年度年次報告が出版された。インド洋区作業部会共同代表を務めていたSarat Chandra Tripathyが、新たに科学運営委員会の副議長に就任した。(田村 岳史/山崎 開平)

#### 22. The Southern Ocean Observing System, Southern Ocean Indian Sector Regional Working Group

インド代表のSarat Chandra Tripathyに代わり、日本から溝端浩平氏が新たに共同議長となった。山崎 開平が若手代表の任期を終えてSOIS RWGに正式加入するとともに、南アフリカのRiesna Audhが新たな若手代表として加わった。

(平澤 享/溝端 浩平/山崎 開平)



### 高精度栄養塩類自動測定装置

# QuAAtro39-J

従来モデルQuAAtro39のポンプを改良・光学モジュールの固定によりラボはもちろん、船上においても安定した高精度測定が可能になりました



新型オートサンプラーAIM4000との組み合わせで更なる高精度類測定を実現  
◎防護ケース標準装備 ◎窒素パージ対応 ◎試験管最大240本搭載可

繰り返し精度\*条件による  
硝酸+亜硝酸:0.15% 亜硝酸:1.0%  
ケイ素:0.15% リン酸:0.15% アンモニア:1.0%



## ビーエルテック株式会社

本社:大阪府大阪市西区江戸堀1-25-7 江戸堀ヤタニビル2F  
TEL:06-6445-2332

東京本社:東京都中央区日本橋大伝馬町14-15 マツモトビル4F  
TEL:03-5847-0252

九州支社:福岡県福岡市博多区博多駅東3-1-29 博多第2ムカキビル4F  
TEL:092-452-0108



情報 ⑥

Journal of Oceanography 目次

# Journal of Oceanography

Volume 81 · Issue 4 · August 2025

## Original Article:

**Sensitivity of the Arctic sea ice representation to the ice thickness category resolution in an OGCM**

T. Toyoda, L. S. Urakawa, K. Sakamoto, Y. Kawakami, K. Aoki  
H. Nakano, Y. Takaya, K. Toyama, N. Kosugi, Y. Kitamura, M. Ishii  
273-288

**Status and prospects of biogeochemical Argo observations of chlorophyll-a in the northwest Pacific**

H. Hayashida, P. G. Strutton, F. Hashihama, N. Horimoto-Miyazaki  
T. Katano, S. Yasui-Tamura 289-299

**High-turbidity bottom mixed-layer water on the shelf off Hokkaido**

**in the Okhotsk Sea: distribution, seasonal variations, and spreading**

T. Nakamura, J. Ueda, T. Kono, J. Nishioka, H. Mitsudera, K. Ito  
301-328

**Multi-time scale variability of surface currents in the Sunda Strait observed by high-frequency radar**

S. Mujiasih, J. Arifin, A. Barth 329-349

## Short Contribution:

**Kuroshio volume transport over the past 3 decades estimated from combined satellite altimetry and hydrography data**

S. Imawaki, H. Uchida, Y.-X. Qiao, H. Nakamura 351-359

Volume 81 · Issue 5 · October 2025

**Special Section on Midlatitude ocean-atmosphere interactions and extreme events**

## Special Section: Original Article

**Intercomparison of bias of global sea surface temperature products associated with tropical cyclone passages in the western North Pacific**

E. Nakada, H. Tomita 361-380

**Spatial structure of rain pool observed on the Kuroshio and Baiu fronts in the East China Sea**

T. Takikawa, Y. Tachibana, H. Nakamura, A. Nishina, A. Manda  
H. Nishikawa, S. Kasuga, Y. Ando, T. Kato 381-391

**Kuroshio surface water intrusion into the eastern part of the**

**transition domain: its pathways and decadal variations**

T. Matsuta, H. Mitsudera, T. Miyama, H. Tomita 393-412

**Air-sea oxygen fluxes in mid-latitude western North Pacific quantified by the array of biogeochemical Argo floats**

N. Kosugi, E. Oka, K. Sato 413-425

**Enhanced wintertime turbulent heat flux along the northward shifted Kuroshio Extension during the Kuroshio large meander**

H. Fujishima, F. Kobashi, N. Iwasaka, H. Tomita 427-441

**Exceptional heat and basin-scale connections in the Kuroshio-Oyashio region in the early 2020s**

S. Minobe 443-461



情報 ⑦

Oceanography in Japan「海の研究」目次

34 巻 4 号 2025 年 7 月

[原著論文]

日本海東部海域の中層を経由するオーバーターニング循環の観測的証拠

大野 舞子・磯田 豊・高槻 文嘉

P129-147, 2025, doi: 10.5928/kaiyou.34.4\_129

34 巻 5 号 2025 年 9 月

[解説]

二重拡散対流ノート 第 1 部 歴史と概要

吉田 次郎

P149-175, 2025, doi: 10.5928/kaiyou.34.5\_149



## ◆SubConnシリーズ

SubConnゴムモールドコネクタは、ケーブルをゴム素材で一体成型し  
防水性や耐久性を高めたコネクタです。【1,400 bar (嵌合時)、800 bar (非嵌合時)】

### Circularシリーズ



### Low Profile シリーズ



### パワーシリーズ



### イーサネットシリーズ



### メタルシェルシリーズ



### Nano シリーズ



## ◆TrustLink Metal Shell Connectors



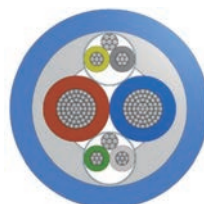
ハイブリッド（電気&光ファイバー）



## ◆水中ケーブル



パワー&通信用



光ファイバー用



丸紅エレクトロニクス株式会社

〒530-0003 大阪市北区堂島1丁目6番20号 TEL : 06-6344-2111 FAX : 06-6346-6611  
URL : <https://www.m-elenext.co.jp>

Marubeni  
Ele-Next



25.9\_1



## 情報 ⑧

# 「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL 編集委員 杉本 周作

### 気象学会 2025 年度秋季大会

日程：2025 年 11 月 4 日(火)－8 日(土)  
会場：福岡国際会議場(福岡県福岡市)  
ウェブサイト：<https://www.metsoc.jp/meetings/2025a>

### PICES 2025 Annual Meeting

日程：2025 年 11 月 8 日(土)－14 日(金)  
会場：ワークピア横浜(神奈川県横浜市)  
ウェブサイト：<https://meetings.pices.int/meetings/annual/2025/PICES/scope>

### International Indian Ocean Science Conference 2025

日程：2025 年 12 月 1 日(月)－5 日(金)  
会場：INCOIS, Hyderabad, India  
ウェブサイト：<https://iiosc2025.incois.gov.in/>

### 第 16 回 極域科学シンポジウム

日程：2025 年 12 月 2 日(火)－5 日(金)  
会場：国立極地研究所(東京都立川市)  
ウェブサイト：<https://www.nipr.ac.jp/symposium2025/>

### AGU Fall Meeting 2025

日程：2025 年 12 月 15 日(月)－19 日(金)  
会場：New Orleans, Louisiana, USA  
ウェブサイト：<https://www.agu.org/annual-meeting>

### 第 39 回数値流体力学シンポジウム

日程：2025 年 12 月 16 日(火)－18 日(木)  
会場：北九州国際会議場(福岡県北九州市)  
ウェブサイト：<https://www2.nagare.or.jp/cfd/cfd39>

### The 106th AMS Annual Meeting

日程：2026 年 1 月 25 日(日)－29 日(木)  
会場：Huston, Texas, USA  
ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/index.cfm/2026/>

### Ocean Sciences Meeting 2026

日程：2026 年 2 月 22 日(日)－27 日(金)  
会場：Glasgow, Scotland

ウェブサイト：<https://www.agu.org/ocean-sciences-meeting>

### Saroma Sea ice School 2026

日程：2026 年 2 月 28 日(土)－3 月 9 日(月)  
会場：サロマ湖(北海道)  
ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/bepsiiwg140/news/bepsi-catch-sea-ice-school-2026>

### CMIP Community Workshop 2026

日程：2026 年 3 月 9 日(月)－13 日(金)  
会場：国立京都国際会館(京都府京都市)  
ウェブサイト：<https://wcrp-cmip.org/event/cmip26/>

### EGU General Assembly 2026

日程：2026 年 5 月 3 日(日)－8 日(金)  
会場：Vienna, Austria (hybrid meeting)  
ウェブサイト：<https://www.egu26.eu/>

### JpGU-AGU Joint Meeting 2026

日程：2026 年 5 月 24 日(日)－29 日(金)  
会場：幕張メッセ(千葉県幕張市)  
ウェブサイト：<https://www.jpгу.org/>

### ESSAS Annual Science Meeting 2026

日程：2026 年 6 月 23 日(火)－25 日(木)  
会場：Reykjavik, Iceland  
ウェブサイト：<https://essas.arc.hokudai.ac.jp/>

### AOGS2026

日程：2026 年 8 月 2 日(日)－7 日(金)  
会場：福岡国際会議場(福岡県福岡市)  
ウェブサイト：<https://www.asiaoceania.org/aogs2026/>

### S2S2D Conference 2026: Advancing climate predictions from weeks to decades to benefit society

日程：2026 年 9 月 7 日(月)－11 日(金)  
会場：Reading, UK  
ウェブサイト：<https://www.wcrp-esmo.org/activities/s2s2d-conference-2026>



## 情報 ⑨

# 「JOS ニュースレター」 アンケート結果

JOSNL 編集委員会

2025 年 8 月 18－31 日に、海洋学会の会員(1,404 名、7 月末時点)を対象として、JOS ニュースレターに関するアンケート調査(オンライン形式)を実施しました。合計で 103 名(全体の 7%)から回答を得ましたので、結果を報告させていただきます。

まず初めに、回答者の所属(Q1)ですが、大学の関係者が全体の 49% を占めており、次に研究機関が 36% でした。性別(Q2)については、男性が 80%、女性が 17% でした。これは、海洋学会の会員

の男女比(男性が 81%、女性が 15%)と近い結果です。年齢(Q3)については、50 代が 33% と最も多く、次に 40 代が 20% でした。中堅がやや多いですが、各年代バランスよく回答されています。

現在のニュースレターに関する質問(Q4)では、ニュースレターを毎回読んでいる方が 74% と多く、時々読んでいる方が 25% でした。興味がある記事(Q5；複数回答)については、寄稿(国内外の受賞、研究プロジェクトや研究助成の紹介など)が 81% と最も多



く、次に情報(国内外の研究会の報告、JO や海の研究、沿岸海洋などの目次、研究会のカレンダーなど)が67%、連載(若手コラム)が63%でした。ニュースレターの満足度(Q6; 5つの星で評価)については、4つ星が43%と最も多く、平均して星3.9でした。

将来のニュースレターで希望する記事(Q7)については、海洋の研究プロジェクトを紹介する記事や研究分野、手法、専門用語などを分かりやすく解説する記事を求める回答が多かったです。また、世代間や分野間の情報交換につながる記事(若手コラム、留学生コラム、シニアコラムなど)を求める回答も多かったです。一方で、読者からの質問コーナーや外部の方による寄稿、企業紹介などもあるとよい、という意見がありました。さらに、ポストクや研究者、乗船参加者の募集など、求人情報に関する意見もありました。

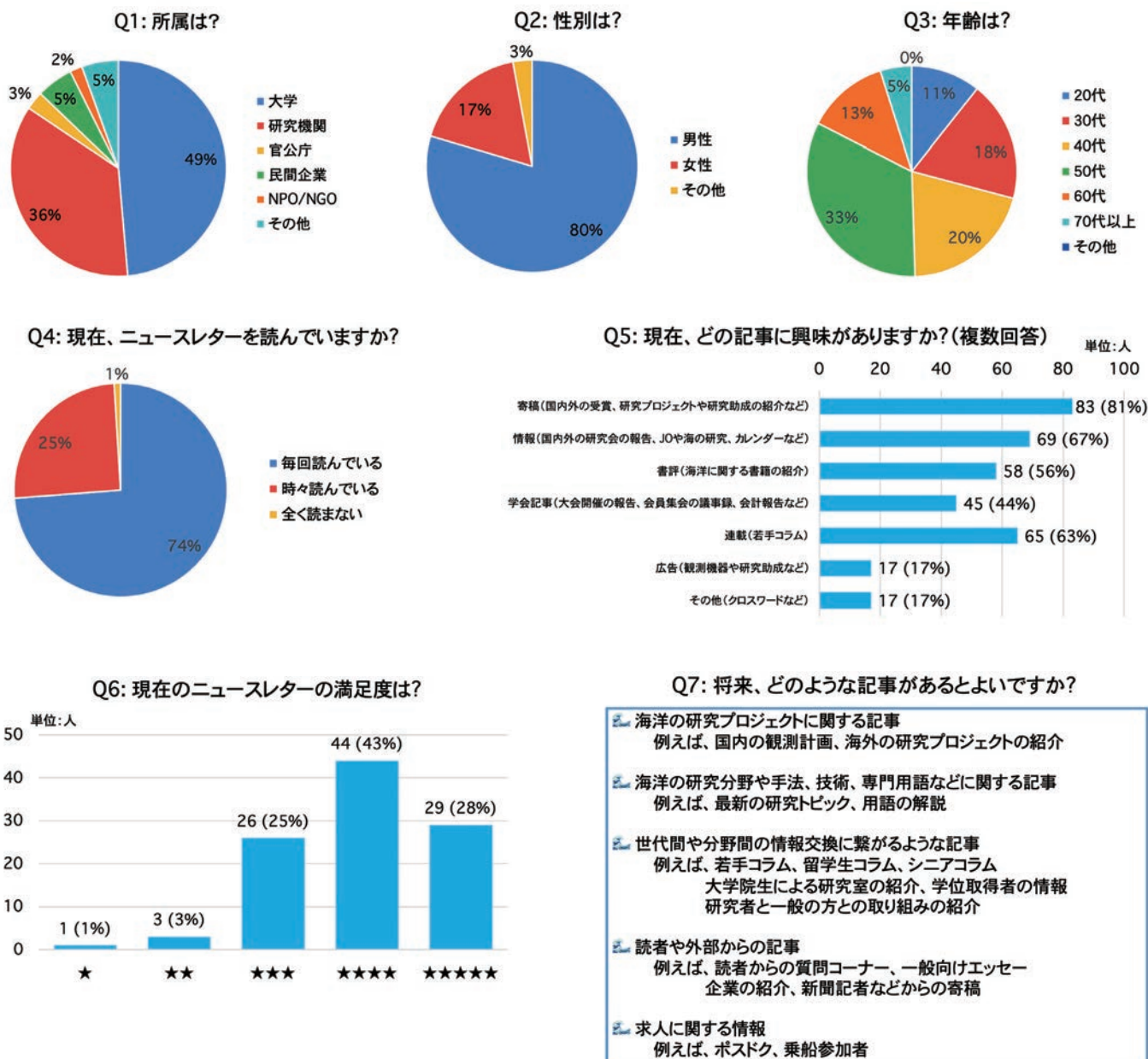
ニュースレターの配布形式(Q8)については、紙またはオンラインを選択可能にするという回答が50%と多く、オンラインのみという回答が36%でした。また、オンラインで提供する際には、メーリングリストなどで知らせてほしい、という意見が多くありま

した。将来の発行頻度(Q9)については、現行と同じ年4回が83%と最も多かったです。

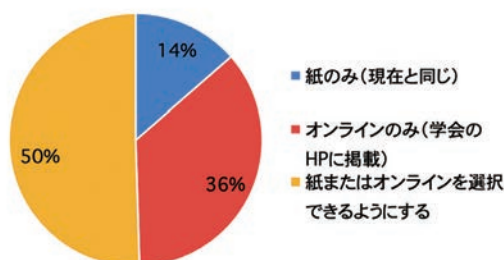
その他、自由回答欄では、ニュースレターのオンライン化に関するご意見のほか、ニュースレターをいつも楽しく読んでおり、編集委員の負担を減らすように努めてほしい、という温かい声がありました。

以上の結果を踏まえて、編集委員会では、ニュースレターの記事の内容について検討し、会員の皆さまに満足していただけるように取り組んでいきます。また、ニュースレターの配布形式について、海洋学会の会員サービスに関わるため、海洋学会の理事会で検討していきたいと思います。アンケートの結果を踏まえて、新たにご意見のある方は遠慮なく編集委員にお知らせください。引き続き、海洋学会の会員向けサービスとして、ニュースレターの品質向上に努めていきますので、皆さまのご協力どうぞよろしくお願い申し上げます。最後になりますが、本アンケートに協力してくださった会員の皆さまに、心から感謝申し上げます。

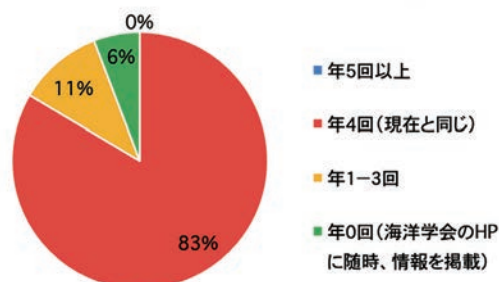
図と表：JOS ニュースレターのアンケート結果



Q8: 将来、どのような形で届けてほしいですか?



Q9: ニュースレターの発行頻度のご希望は?



## アカデミア メランコリア (第47回) (若手のコラム)

東京大学 大学院農学生命科学研究科 田中 翔大

この度、北海道立総合研究機構の新井 嵩博さんからご紹介いただき、寄稿の機会を賜りました、東京大学大学院農学生命科学研究科の田中翔大と申します。私は、水産資源の変動機構の解明をめざして、イワシ類仔魚の成長速度や摂餌行動に着目した研究を行っています。今回のお話をいただいた際には自身の研究内容をご紹介しようと思ったのですが、自分のことを自由に書ける機会はなかなかないと感じ、ここではこれまでの大学生活や研究の道を志すに至った経緯についてお話しさせていただきます。



私は新潟県出身で、幼い頃に父親とよく海釣りに出かけたことから魚に興味を持ち始めました。高校卒業後は1年間の浪人を経て、「魚に関わる仕事に就きたい」という漠然とした思いから東京海洋大学へ入学しました。入学後は、「太平洋の魚をたくさん見たい」という単純な動機から、「水産生物研究会」という生物サークルに入りました。このサークルでは興味のある分類群ごとに班が分かれており、私は「魚類班」に入りました(なお、本寄稿の紹介をいただいた新井さんは「藻類班」の先輩です)。

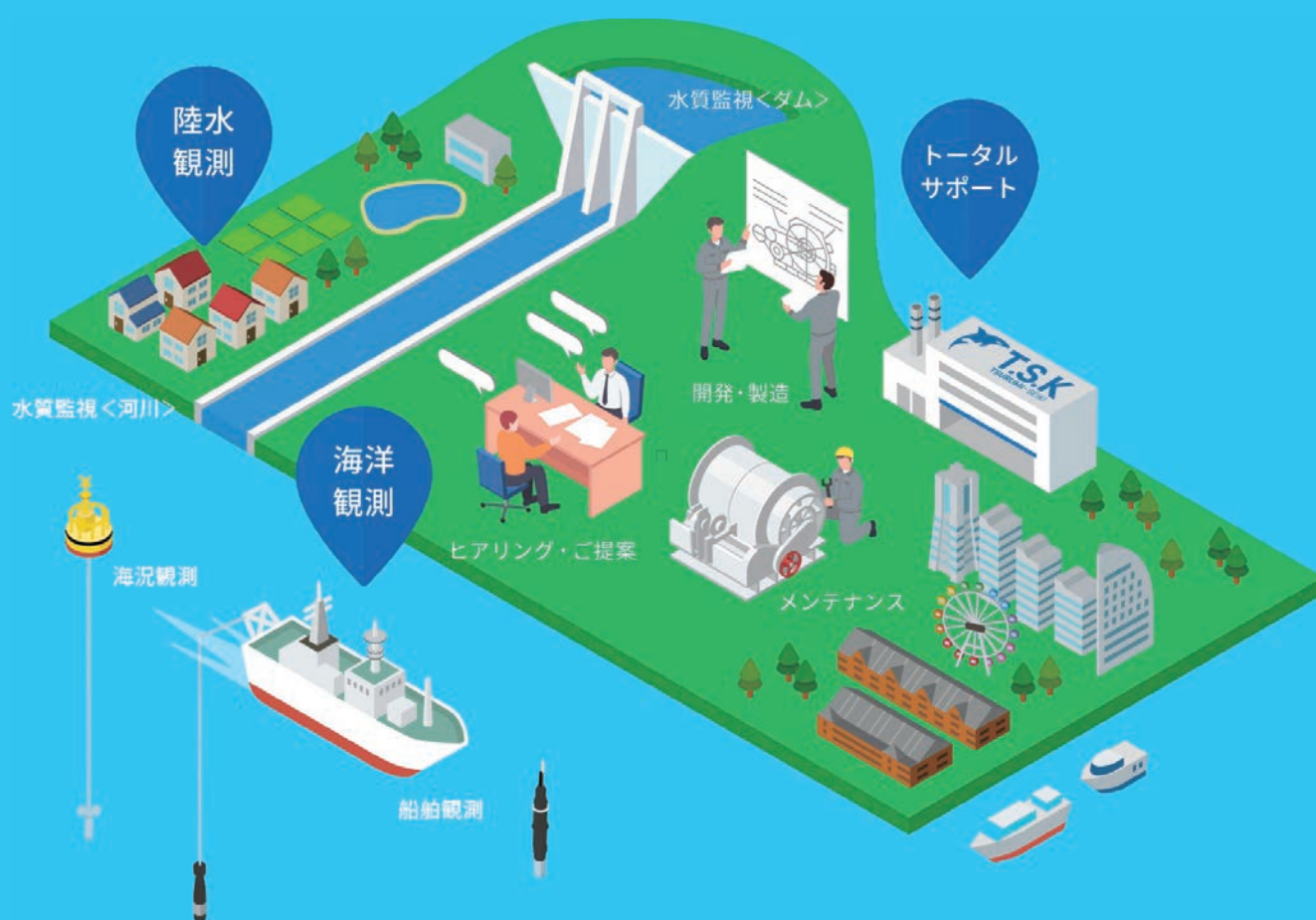
魚類班では、新潟の日本海では見られなかった数多くの魚を観察できました。しかし、それ以上に嬉しかったのは、数多くの「魚オタク」に出会えたことです。自分の好きな魚を語る友人がいなかった私にとって、魚について熱心に語り合う仲間存在は非常に新鮮で、一緒に活動できることがこれ以上ない喜びでした。このような「好き」を共有できる人たちと一緒に働けたらどんなに幸せだろうと思いました。

東大の大学院に進学してからは、共同研究や学会発表を通じて、さらに多くの「好き」を共有できる人たちと交流する機会に恵まれました。私が出会った研究者は、本当に楽しそうに研究の話をしていて、「水産生物研究会で出会った魚オタクと同じだ」と感じました。こうした人たちから刺激を受けながら研究を進めることは本当に楽しく、今後もこのような環境で仕事ができれば幸せだと思い、研究者の道を歩む決意を固めました。

私は現在博士課程の3年目になりますが、研究を始めた頃よりも楽しく皆様と交流が出来ていると感じます。これは、以前より幅広い知識を身に付けられたこと、そして自分自身の研究を深められたことによると考えています。今後は国内外での交流をさらに広げるため、自身の視野を広げつつ、研究をより極めたいと思います。まずは博士学位の取得に向けて、研究を一つひとつ形にし、皆様に自信を持って成果をご紹介できるよう、論文執筆に励んでまいります。そして近い将来、皆様に自分の「好き」をお伝えできれば幸いです。



# 終わりのなき航海の パートナーとして。



海洋・陸水・大気観測における調査活動に  
正しい知見と洞察を提供します。

株式会社 鶴見精機

<https://tsurumi-seiki.co.jp/>  
[sales@tsk-jp.com](mailto:sales@tsk-jp.com)

本社・横浜工場サービスセンター

神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央二丁目2番20号  
TEL: 045-521-5252 FAX: 045-521-1717

TSK America, Inc.

P.O. Box 70648 Seattle, WA 98127 USA  
Phone: +1-206-257-4899  
e-mail: [tony@tsk-jp.com](mailto:tony@tsk-jp.com)

水中測器製造部門(白河)

福島県白河市大信中新城字弥平田17-5  
TEL: 0248-46-3131

リエゾンオフィス(インド)

Liaison Office (INDIA)  
Level-12, Building No.8, Tower-C  
DLF Cyber City-II, Gurgaon-122002  
Haryana, India  
Phone: +91 - 9810173319, 9560264316  
e-mail: [tski@tsk-jp.com](mailto:tski@tsk-jp.com)

## 編集後記



水産研究・教育機構の杉崎と申します。今年の4月より JOS Newsletter の編集委員を仰せつかっています。私が日本海洋学会に入ったのは1986年ですので40年近く経ってしまったことに我ながら驚いています。学会法人化前に広報幹事をさせていただいており、海洋学会には長年お世話になっております。

私は主に大型の外洋性の動物プランクトンとそれを取り巻く生態系の構造や長期変動をテーマに研究をしておりましてので、Newsletter では主に生物系の記事に関する編集等をさせていただいております。日本海洋学会がこれからも世界をリードする海洋研究活動を続けられますよう、Newsletter がお手伝いできれば幸いです。

Newsletter の前号より記事タイトルのヘッドに魚のイラストが張り付いていることにお気づきでしょうか？この図は、水産研究・教育機構が水産物に関する科学的知見を消費者向けに伝える SH“U”N プロジェクト(専用サイトの公開は終了しましたが、水産研究教育機構機関リポジトリで SH“U”N 報告書にアクセスできます。)のため

に、日本画の素養のある女子美術大出身の方々に制作いただいたものです。なるべく Newsletter の発行時の季節に合わせた種を選定しています。

今号の魚はサンマ、サワラ、シシャモです。秋の味覚として代表的なサンマをはじめ、いずれも秋が旬の魚たちです。今年の秋は数年ぶりにサンマの漁獲量が多く脂ものっていると評判ですが、サンマの分布域や餌環境は北太平洋の海洋動態に大きく依存しており、漁業の動向把握に海洋環境研究が深くかかわっている魚種です。

サワラは春に水揚げが始まっていたことから魚偏に春(鱈)と書き、西日本でなじみの魚ですが近年の温暖化により東北地方でも漁獲されるようになりました。

この図のシシャモ(*Spirinchus lanceolatus*)は北海道太平洋岸の一部地域にのみ分布する魚で、居酒屋やスーパーで見かけるシシャモはカラフトシシャモ(*Capelin ; Mallotus vilosus*)という別種です。シシャモは水揚げ量が少なく珍重されていますが、抱卵量はカラフトシシャモより少ないです。(編集委員 杉崎 宏哉)

## 広告と記事募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。

海洋学に関連する機器や書籍、助成などの広告や、

研究やプロジェクト、会議などの記事を募集しています。

お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒236-0001 神奈川県横浜市金沢区昭和町 3173 番 25 海洋研究開発機構  
電話：045-778-5509 メール：morioka@jamstec.go.jp

**JOS News Letter**

JOS ニュースレター  
第15巻 第3号 2025年11月1日発行

### 編集 JOSNL 編集委員会

委員長 森岡 優志、委員 杉本 周作、杉崎 宏哉、眞塩 麻彩実

〒236-0001 神奈川県横浜市金沢区昭和町 3173 番 25

海洋研究開発機構

電話 045-778-5509

メール morioka@jamstec.go.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町 68

西川徹ビル 1F

<http://www.smash-web.jp>

発行



一般社団法人  
**日本海洋学会**  
The Oceanographic Society of Japan

### 日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル

(株) 毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

(表紙の写真)

米国プリンストン大学の気象海洋科学プログラムの隣で見つけた紅葉です。10月下旬でしたが、鮮やかな色で、青い空と緑の芝とのコントラストが美しかったです。

ISSN 2758-8645